

今こそ「ニューディール」！

石原都知事が辞任して国政に再進出、それぞれの党が数合わせに血道をあげ、焦点は衆議院選に移りつつあります。そこで思うことは、各候補の志というかスケールの小ささです。次の当選のために掲げていた主義主張まで捨て党内外を右往左往する“政治屋”たち。もちろん、そう言う自分などは政治とはまったく別次元の世界を歩んできたので、皆の足元にも及ばないことは十分に承知しています。それでも「政治家」を目指すからにはこのくらいの志はもって欲しい、といった願望があるのです。

それはアメリカが大恐慌に直面し、ほとんどの国民が将来に不安を抱いていたときに登場した第 32 代フランクリン・デラノ・ルーズベルト大統領（1882～1945）の就任演説と実績です。以下は世界の著名な政治家の名演説集「Speeches」(The Penguin Books of Twentieth Century) からの引用です。(翻訳：筆者)

<解説>

1933 年の大統領就任の日、すべての銀行は閉ざされ、商業活動は止まっていた。そして不景気は最悪の状態にあった。失業の広がりがどうしようもない絶望を作りだしていた。

フランクリン・ルーズベルトが登場するまではアメリカは到底立ち上がれそうもないと思われていた。彼はポリオに冒され 1921 年から 2 本の足が不自由になっていたが、1932 年の大統領選挙で 1200 万の投票の大部分を獲得し 42 州で勝利をおさめた。

そして寒い 3 月の日、足の不自由なルーズベルトは、自らの国を救うための誓いを、ラジオ放送を通じて何百万のアメリカ人に訴えたのだった。

氏の就任演説はアメリカの歴史の一つの転換点となった、と歴史家のヒュー・ブローガンは言っている。たった数分でハーバート・フーバー（前大統領）が 4 年間回避していたものを成し遂げた。そして国民に希望とエネルギーを再びもたらしたのだった。



ルーズベルト大統領就任演説 <冒頭部分> 1933年3月4日 ワシントンにて

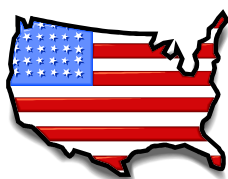
フーバー大統領、最高裁長官、そしてわが友人の皆様

今日は国家への献身の日です。同志たるアメリカの国民は私の大統領就任し際して、国家が直面している喫緊の課題に対して誠実さと決意を表明することを期待していると私は確信しています。

今は、真実を、すべての真実を率直に大胆に語るべき時です。現在のわが国の現状に正直に立ち向かうことをためらう必要はありません。偉大なるわが国はこれまで持ちこたえてきたように、これからも持ちこたえていくでありましようし、復活し繁栄していくでしよう。

そこでまず最初に、私の抱いている確信を申し述べさせていただきたい。それは「我々が怖れなければいけないことは怖れそのものである」ということなのです。つまり、名前もない、理不尽な、正当性のない怖れは、後退から前進へ転換しようとする我々の努力を止めようとするからです。

国の歴史の暗い時代には、正直さと活力を持ったリーダーシップが、国民の理解と支持に支えられていました。それは勝利に絶対的に必要なものなのです。私は、この危機の時代に国民の皆さんが指導者に再びその支持を与えてくださるであろうことを信じています。
(以下略)



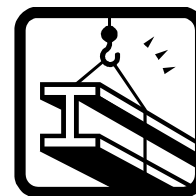
なんと確信にあふれた呼びかけでしょうか。演説の内容は少し後の第35代ケネディ大統領の就任演説にも似ています。「祖国があなたに何をしてくれるかを尋ねてはなりません、あなたが祖国のために何をできるか考えて欲しい」。

国難の時代には国民にもその覚悟と負担を求める。本当に実情が分かれば国民も協力していくものなのです。

ルーズベルトはアメリカでもっとも長い任期（4期）選ばれた大統領であり、大恐慌、第2次世界大戦という世界的にも最も困難な時期のアメリカを導いた大統領でした。また、ポリオで下半身まひの障害者でもあり、福祉の充実にも力を注ぎました。

ルーズベルトの公約は、“**I pledge you, I pledge myself, to a new deal for the American People**”（私は皆さんに約束します。私はアメリカの人々のためにニューディールを行うことを約束します）でした。

「ニューディール」とは新規まき直し政策とも呼ばれ、世界恐慌を克服するために行った一連の政策です。公約の通り、大統領は当選すると議会に働きかけて矢継ぎ早に景気回復や雇用確保の新政策を審議させ、最初の100日間でこれらを制定させたのです。このスピードと実行力！！



未来が不透明で展望のない日本にも、こうした長期ビジョンを描き確固たる理念と実践力を持った志の高い政治家の輩出を心から期待するところです。